

テーマ展「“こと”のことー日本伝統の絃楽器ー」展示作品リスト

	名称	作者	時代	備考
げんがつき <small>そうしょう</small> 絃楽器の総称「こと」				
1	えいりげんじものがたり 絵入源氏物語		江戸時代 承応3年（1654）	
わごん 和琴				
2	わごん めいあおい 和琴 銘葵	まつもとしげゆき 松本重行	南北朝時代 永徳元年（1381）	
3	ことさぎ 琴軋		江戸時代	和琴の演奏で使用するピック（水牛角製）
4	ことさぎ 琴軋		江戸時代	和琴の演奏で使用するピック（鼈甲製）
そう 箏のこと				
5	そう めいあきやま 箏 銘龜山	けいゆう 慶祐	鎌倉時代 徳治2年（1307）	雅楽で使用する箏
6	そう 箏	まついさきち 松井佐吉	室町時代 嘉吉2年（1442）	雅楽で使用する箏、八橋の意匠で統一した装飾
7	そう 箏		江戸時代	雅楽以外の演奏で使用する箏
8	そう 箏	しげもとふさきち 重元房吉	江戸時代 文化5年（1808）	雅楽以外の曲の演奏で使用する箏（山田流）
9	そう 箏		江戸時代	通常よりも短い箏
10	そうのつめ 箏爪		江戸時代	雅楽の演奏で使う爪
11	そうのつめ 箏爪		江戸時代	雅楽以外の曲の演奏で使う爪（山田流）
12	そうのつめ 箏爪		江戸時代	雅楽以外の曲の演奏で使う爪（生田流）
13	そうのつめぶくろ 箏爪袋		江戸時代	
きん 琴のこと				
14	しちげんきん 七絃琴		中国・明時代	<small>きのしたちようしょうし</small> 歌人の木下長嘯子（1569～1649）所持と伝える
15	しちげんきんあん 七絃琴案		江戸時代	七絃琴を乗せる台
びわ 琵琶のこと				
16	びわ 琵琶	けんい 賢意	鎌倉時代	雅楽で使用する琵琶
17	びわかかけ 琵琶掛		江戸時代	琵琶を立てる台
18	びわ めいあきかぜ 琵琶 銘秋風	えんじょう 円乗	室町時代 宝徳2年（1450）	雅楽で使用する小型の琵琶
19	びわ めいうんりゅう 琵琶 銘雲龍		中国・明時代か	背面に螺鈿装飾がある琵琶
20	びわかかけ 琵琶掛		江戸時代	琵琶を立てる台
21	びわ めいはつね 琵琶 銘初音		江戸時代	雅楽以外の曲の演奏で使用する琵琶（平家琵琶）
22	びわばち 琵琶撥		江戸時代	つけ 黄楊製
23	びわばち 琵琶撥		江戸時代	鼈甲製
24	びわばち 琵琶撥		江戸時代	水牛角製
25	びわのふくろ 琵琶袋		江戸時代	

※いずれも所蔵は彦根城博物館

作品解説

1 和琴 銘葵 松本重行作 1面 (作品リストNO. 2)

全長 192.9cm 最大幅 24.2cm

南北朝時代 永徳元年 (1381)

当館蔵 (井伊家伝来資料)

和琴は、倭琴とも言い、弥生時代以来演奏されてきた、日本古来の「こと」の系譜を引く絃楽器です。長さは約190cm。絃は6本で、一方の端を葦津緒と呼ばれる絹の編み紐に結び、これを楽器の端に掛けて絃を張ります。絃の下に二

股の楓の枝で作った柱を立て、右手に持った琴軋というピックで演奏します。装飾を施さない簡素な作りが特徴で、雅楽の内、日本古来の歌舞である神楽や東遊などで使用します。

この和琴は胴の内部の銘から、持明院家の家臣である松本重行が、永徳元年(1381)に作ったことが分かっています。持明院家は、神楽や東遊を伝承する家であったため、和琴の制作にも関わっていたのでしょう。制作年代と作者が明らかな、貴重な作例です。



2 箏 銘龜山 慶祐作 1面 (作品リストNO. 5)

全長 191.3cm 最大幅 26.3cm

鎌倉時代 徳治2年 (1307)

当館蔵 (井伊家伝来資料)

箏は、奈良時代に中国から伝来した絃楽器が起源となった楽器です。長さ190cm程度の胴に13本の絃を張り、絃の下に山型の柱を立て、右手の指にはめた爪で演奏します。

この箏は、雅楽の演奏で使用するものです。楽箏と呼び、後に雅楽以外の演奏で使用されるようになった箏と区別します。胴の内部に記された墨書から、徳治2年(1307)に慶祐という人物によって作られたことが分かります。慶祐については、詳細は明らかではありません。

また、箏には、楽器の左右の端に蒔絵や螺鈿で装飾を施すものが多くあります。この箏の装飾は江戸時代に加えられたと考えられるもので、州浜形と菊花、雁を散らします。州浜や雁は、箏の装飾に多用される文様です。



箏 銘龜山 (全体)



箏 銘龜山 (部分)

3 箏 1面 (作品リストNO. 7)

全長 189.2cm 最大幅 26.2cm

江戸時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

雅楽ではない、主に箏のみを用いて演奏する音楽、箏曲で使用する箏です。雅楽で使用する楽箏に対して、俗箏と呼びます。形は楽箏とほとんど変わりませんが、絃を掛ける竜角と呼ばれる部分に、枕糸という絹の組紐を挟みこむ点が異なります。また、俗箏では楽器に施される装飾がより手の込んだものになり、中には楽器の側面にまでも装飾を加えた、非常に豪華なものも作られました。

この箏は、まさにその一例です。一方の端の装飾に玉を取る竜の金物を据え、もう一方には鼈甲の下に飛天を描いた紙を置いた華やかな装飾を加え、さらに側面にも、さまざまな色の木片を組み合わせて帯状の装飾を施しています。



箏 (全体)



箏 (部分)

4 七絃琴 1面 (作品リストNO. 14)

全長 121.3cm 最大幅 14.5cm

中国・明時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

七絃琴は琴の別名です。現在、琴とは別の楽器である箏を「琴」と書いて「こと」と呼ぶため、これと混同するのを避けて、琴ではなく七絃琴と呼ぶのが一般的です。

七絃琴は、中国で古代から演奏されてきた長い歴史を持つ絃楽器で、これを演奏することは、君子や知識人のたしなみとして尊重されてきました。120cm前後の漆塗りの胴に7本の絃を張り、絃の下に柱は立てず、左手で胴の上の目印を押さえ、右手の指で演奏します。

日本には奈良時代に伝来しました。雅楽では使用せず、貴族の間で主に独奏楽器として演奏されたものの次第に廃れ、鎌倉時代にはほとんど行われなくなりました。江戸時代初期、明から来日した禅僧、東皐心越 (1639~1695) がこれを伝えて再び演奏されるようになり、儒学者や文人の間で流行しました。

この七絃琴は、江戸時代初期に活躍した歌人である木下長嘯子 (1569~1649) が所持していたと伝える1面です。



5 琵琶 賢意作 1面 (作品リストNO. 16)

全長 101.1cm 最大幅 41.0cm

鎌倉時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

琵琶は、西アジアに起源を持つ絃楽器で、中国を経て、奈良時代に日本にもたらされました。長さは100cm前後で、茄子型の胴と後ろに曲がった頸を持ち、弦は4本。撥を使って演奏します。

この琵琶は雅楽に用いる琵琶です。平家琵琶などの雅楽以外で使用する琵琶と区別して、楽琵琶と呼びます。

内部の銘記から、賢意の作であり、延徳元年(1489)に大蔵卿なる人が修理したことが明らかな作例です。楽器に付属する文書の内容からみて、この琵琶は大阪の天野山金剛寺に伝来したものであると考えられます。また、作者の賢意は、鎌倉時代の建治年間(1275~1278)頃に琵琶の製作を行った人物であることが分かります。

